

# 石川淳「マルスの歌」再論

——冬子・帯子姉妹の共通性と対照性

山口俊雄

石川淳「マルスの歌」は、今からおよそ七十五年前の日中戦争下、『文學界』一九三八年一月号に発表され、『反軍又ハ反戦思想ヲ醸成セシムル虞アリト認メラルルニ因リ』<sup>(1)</sup>発売禁止処分を受けた。

戦争反対、いや正確には〈戦争支持〉反対という作品の主題を踏まえて、アフガニスタン戦争・イラン戦争時に合衆国でこの作品が作品英訳（全文）とともに紹介されたことは、この作品の古びなさと国境を越えた普遍性を物語ることになったが、戦争を可能にする空気の醸成とそれへの同調圧力を批判するために二〇〇〇年代初頭から繰り返し「マルスの歌」に言及して来た辺見庸が3・11以後の我が国の状況を睨んで最近著『瓦礫の中から言葉を一わたしの〈死者〉へ』（NHK出版、二〇二二・一）の中で改めて「マルスの歌」に言及している。

辺見は作中の次の箇所を引用している。

たれひとりとくにこれといつて風変わりな、怪奇な、不可思議な真似をしてゐるわけでもないのに、平凡でしかないめいめいの

姿が異様に映し出されるといふことはさらに異様であつた。『マルスの歌』の季節に置かれては、ひとびとの影はその在るべき位置からずれてうごくのであらうか。この幻燈では、光線がぼやけ、曇り、濁り、それが場面をゆがめてしまふ。<sup>(4)</sup>

その上で、次のように述べている。

状況は質的にことなります。これは戦時における日常の雰囲気を実時間でもっともみごとに描いた石川淳の小説「マルスの歌」（一九三八年「昭和十三年」の一節です。つまり、戦時ファシズム下の市井の風景を切りとつたものですが、このたびの大震災以降、わたしはいくどもこのくだりを想い出しました。

震災時と戦時の空気はどこか似るのでしょう。一見おつうなのだけれども、なんだか異様。光や影の言うに言えないたわみ人びとが本来あるべき位置からずれているのではないか。引用文はそんな微妙な感覚表現です。微妙な感覚の誤差が、歴史の暗転を見わけるか見わけないかの決め手になる気もします。

引用した文章のすぐ後には「ひとびとを清澄にし、明確にし、

強烈にし、美しくさせるために、今何が欠けているのか」という自問がつづきます。これは、3・11以降にわたしがいだきつづけている疑問とどこかで交差するのです。(九三、九四頁)

戦争や大災害による大量死。その大量死を意味付けるべく、メディアに媒介され作動するナシヨナリスティックな社会心理・群衆心理。このような作動・連動のメカニズムは、作品が発表された七十五年前とおそらくほとんど何一つ変わっていないはずである。だからこそ、「マルスの歌」が今なお読まれ、そのメカニズムを鮮やかに小説表象として結実させたとして評価されているのである。

小稿は、今なお〈現在〉を、〈現在の困難〉を描いた小説として——ある意味で大変不幸にも——読まれ続けるこの作品について、特に作品内世界の構図を支える冬子・帯子に割り振られた役割に視点を定めて検討することを通し、作品の魅力のさらなる解明にいささかなりとも寄与しようとするものである。

## 二

稿者は、以前既に「マルスの歌」について論じたことがあり、従来、掲載誌の発売禁止処分と相俟って反軍的・反戦的な主張を盛り込んだ勇氣ある作品ということで評価されて来たこの作品について、「銃後国民」の狂騒状態を十分に描き込んだ上でそこに同一化できない語り手が浮かび上がってゆく様を跡付けた。その際、銃後国民の群衆心理を高みに立って批判するというよりも、自他いづれが正気か狂気かと戸惑い、また身近な者が戦時体制の中で変わってゆく様に振り回される語り手の姿が確認できたが、日中戦争勃発後の銃

後の狂騒状態の中でそれぞれに変わっていつて語り手《わたし》を振り回すのが従妹の冬子・帯子姉妹であった。

それぞれに変わっていった、と書いたが、冬子は戦時体制への不適応が昂じた結果であるかのように自殺し、他方、帯子は戦時体制に適応、出征兵士を励ますチアリーダーとなり、と、非常に対照的である。

姉妹についての考察として前稿ではこの対照性を確認したところまでで終わってしまっていたが、姉妹である以上は当然ながら共通性も想定されていたはずであり、本稿では、共通性を探りながら、その共通性の上に配された対照性を明らかにしてみたい。

たいへん愉しく立ちはたらいた料理の時刻以外は、冬子は、毎日本を読んでくらしめてゐた。ただしその本の範囲は翻訳の戯曲だけに限られてゐて、好ききらひなく熱心に読みあさり、筋だのせりふだのをよく暗記してゐたが、ほかの部門のことになると冬子はおやと思ふほど何も知らなかつた。休みの日には、二人は小旅行したり映画を見に行つたりしたが、とくに新劇の公演を欠かしたことがなく、三治もいつかその趣味の中に翻訳の芝居をかぞへるやうになつてゐた。(五六一)

写真部員として新聞社に勤めるお坊ちゃん育ちの夫(三治)を持つ冬子は、この通り、他のことに関心を持たず、もっぱら翻訳の戯曲を読むこととその上演を見ることを楽しみに生きていた。

演劇への関心は、読んでいる戯曲に触発され、いろいろな真似をすることへと昂じてゆく。《聲》の真似、《唾》の真似、《盲》の真似、

《跛》の真似、……。《しかし、それは結局三治が奇跡をおこなふひとの役割を演ずることに依つて快癒した》(五六二)。

死んだ人の真似を試みた冬子は、『自殺の真似してみようかしら。』(五六二)と三治に話しかける。もちろんあくまでも真似で終わるはずだったのだが、『いくらか呼吸器が弱かつたやうでした』(五六三)ということもあり、帰らぬ人となる。

これらから浮かび上がるのは、翻訳の戯曲を窓口には真似ること「演じること」のみを喜びとして、実社会とは無縁に夫とのままごとのような生活を暖めていた若い女性の姿である。三治が《もしさういふときの冬子に、何か病的なもの、不安なもの、ぶきみなものが感じられたとしたら、ほくにしても決してほんやりしちやみられなかつたでせう。しかし、さういふときの冬子はとても美しく、かはいらしく、健康に満ちみちてゐたんです。》(五六三)と言うように、真似に夢中になること自体には悲劇の影は薄い。従つて、時代が変わり戦争色が強くなる中で、冬子は居場所がなくなり、追い込まれて行つた果てに死があつたという風な見方はおそらくすべきではなく、むしろ、戦争色といつた現実とそもそも関わり合えないのが冬子の性質だつた、そのため時代が変わつていよいよ現実社会から遊離していった、と見るべきなのかもしれない。

この冬子の演劇的世界への自己充足・現実遊離に対して、戦時下銃後の今・この現実社会に即応・密着するのが妹の帯子である。

《帯子、どう考へても死んで行くひとと縁がないやうだ。今みたいに、遠くで死にたくないひとが毎日たくさん死んでるときに、なんとなく自分勝手に死んぢやふなんて……決して、冬子を責めるわけぢやないの。なぜ冬子が死んだか、死んだのがいいのかわるいの

か、そんなこと知らない。考へない。第一もう死んぢやつたひとなんだもの。よーし、オビイ、もうそのこと考へないぞ。》(五五九)と冬子の死から自らを切り離す。いやむしろ、冬子の死を自分と自分の生きる今・この現実社会から切り離すと言うべきだろう。《知らない。考へない。》という判断停止的な態度で、今・この現実へ埋没し、同一化してゆく。

従つて、兵隊を乗せ流行の軍国歌謡「マルスの歌」を流すトラックが近くを通れば、《帯子は窓ぎはに駆け寄り、硝子戸を上げて、街路にむかつて大きく呼吸し、湧きかへる外の喚声とともに、右手を高く振りかざしながら、／＼ばんざい!》(五五九)と声を上げる。

冬子の通夜の席で三治に《赤色の紙切》《目下この国のわかものを駆つて、たれかれの差別なく「マルスの歌」の合唱のうちに、硝煙のほひがするはるか遠方の原野へ狩り立てるところの運命的な紙切》(五六七、五六八)が届き、ここに至つて冬子と三治と二人で演じていた「ままごと」は完全に終わる。そして、戦時下の今、ここへ放り込まれようとする三治を受け止める妹の帯子の出番となる。

本籍地の宇都宮で入営するまでの猶予期間に三治は帯子と二人で伊豆半島を走り回る。

「全然競争なの。おたがひに抜きつこししてゐるみたい。息が切れさうになると、もつと息が切れさうなこと代るがはる考へ出すの。海へ行かうといひ出したのは帯子なの。そしたら、静浦まで行かないうちに、三治はもう山がいいつていふの。」「いや、

オビイがそばから拍車をかけてくれるんだ。」(五七四)

「帯子にも判らない。何だかとてもいい気持ち。でも、三治つたら、ずぶぶんはらはらさせるの。沖で、いきなり泳ぐんだつてつめたい水の中に飛びこみさうにするの。車に乗つたら、きつと崖つぶちをすり抜けなけりや承知しないわ。」「もう危険が危険でなくなつて来た。ここでは、宇都宮までは、何をしようと安全でしかないといふ気がする。」(同)

《もう危険が危険でなくなつて来た》《何をしようと安全でしかない》という逆説的な心理には、戦地に赴く兵士の運試しのようなところもあるが、ここに記紀神話における「三韓征伐」を踏まえた、帯子(タラシコ) || 神功皇后(息長帯比売 || オキナガタラシヒメ)による励ましが重ね書きされていることは前稿で詳しく見た通りである。日中戦争下における帯子の振る舞いには神話的背景があったのである。

さて、これで材料は大体揃った。二人の共通性について考えてみよう。

演劇好きの冬子の真似という営みから、既に見たようにその《演技》が特徴として浮かび上がるのであれば、妹の帯子についてもまた《演技性》というものを見出させないものだろうか。

先に稿者は帯子のふるまいについて、《戦時下銃後の今・この現実社会に即応・密着する》とか、《今・この現実へ埋没し、同

一化してゆく》という言い方をした。もし、《演技性》という観点からパラフレーズするならば、銃後総動員体制下の今・この現実が求める役割(兵士を励ます若い女性という役割)を演じていることになるだろう。その時、台本あるいは演出家と呼ぶべきものは、総動員体制下の群衆心理ということになるだろう。

冬子の場合、台本は、西洋の戯曲であり、また身体の特異な状態であったのに対し、帯子の場合には現実が台本となり、現実から求められるものを演じていたということになるが、いずれも一種「自分がない」という点で共通していることになる。この「自分のなさ」、自己の空虚さ・空洞性を強調するならば、二人の《メディア性(巫女性)》 || 憑依性 || シャーマン性) という見方も成り立つだろう。

この《メディア性 || シャーマン性)》を共有しつつ、しかし、それぞれが纏うものは全く対照的である。

外向的、躁的な帯子に対して、内向的、メランコリックな冬子。現実が憑依する帯子、現実を真似する帯子に対して、虚構(文学、翻訳戯曲)が憑依する冬子、虚構を真似する冬子。集団主義に親和的な帯子に対して、文学主義的、個人主義的な冬子。……いくつもの二項対立・対照性を見出してゆくことができるが、特に注意しておきたいのはやはり《死》の問題である。

帯子が姉の死について、《今みたいに、遠くで死にたくないひとが毎日たくさん死んでるときに、なんとなく自分勝手に死んぢやぶなんて……》と言ったように、「内向的な人間による虚構上の死の試みの失敗としての事故死」である冬子の死は、虚構上の死であり、どこまでも個人的な、私的な、《自分勝手》な死であるのに対して、帯子が寄り添い、同一化しようとしているのは、現実の死であり、

戦地における兵士たちの死であり、公的な死である。

従って、帯子において、出征兵士を乗せたトラックに向けての《ばんざい!》も、伊豆における三治との拍車のかけ合い・激励も、公的な死につながっている兵士たちへのシャーマンとしての同一化と見るべきであり、それが現実から遊離した姉のようなあり方と相容れないものであることは明らかだが、だからといって冬子が時局のすべてを肯定する存在と化したわけではないことを見過ごしてはならないだろう。

それは、冬子の通夜の席で冬子の死の原因についての推測から始まってやがて時局をめぐる話へと展開していった列席者のおしゃべりをたしなめる帯子の次のような言葉に明らかである。

「ここで、あなた方は何をいふことがあるんです。勝手に愉しく『マルスの歌』のおしゃべりをしていらつしやい。それがどんなものか考へてみもしないで。そんなに好きな歌なら、本気になつて歌つてごらんさい。さあ、みんな『マルスの歌』を合唱してごらんさい……」(五六七)

この言葉を踏まえれば、帯子に神功皇后が憑依しているにもかかわらず、帯子に単純に好戦性を認めることは難しいことも分かる。帯子は戦争遂行そのものに対して肯定的に同一化しているのではなく、むしろ開戦後の現実の中で、死んで行く兵士たちに寄り添っているということになる。

なお、列席者のおしゃべりにちなんだ付言しておくならば、死んだ冬子は、自らの死によってその通夜の席で列席者たちのおしゃべ

りを発生させ、時局に対する俗情に満ちた人々のありようを浮かび上がらせる(シャーマン＝メディア)となつているとも見られよう。以上、共通性と対照性を確認して来たが、まだもう一つ、二人の共通性というべきものが残っていた。

すべてこの間、わたしは柱にちつと倚りかかつて、一語も発しないであつた。ざわめきは耳朶の端を掠めて消えて行つた。わたしはただ先刻最後に見た冬子の顔、三治のいつた通り念人に化粧した美しいその顔を宙に追つてゐた。わけてもあやしい光に沈んだその唇の紅の色を……(五六七)

ほとんど視野からそれ「富士山」を追ひのけるために、わたしは望遠鏡で沖を眺めはじめた。「略」向うの岬の鼻から小舟が一艘進んできた。「略」ああ三治と帯子だ。「略」舳で船頭が左の手に抱へた水鏡めがねを水面に押し当て、その上にかぶさるやうにして底をのぞきこみながら、タコでも突いてゐるのか、右の手で竿をあやつつてゐる。三治と帯子が笑ひながらそれを眺めてゐる。二人ともたいへん健康さうにびちびちしてゐる。何を心配することがあるのだ。けふは帯子はとく美しい。黄ろい衣裳が晴れた水の上に似合つて見える(五七三)

いずれも姉妹の美しさを語り手《わたし》が見出し、書き留めた箇所である。二人は美しきシャーマン(巫女)だったのである。

ただし、注意しなくてはならないのは、どちらも周囲から切り離された状況にあつて初めて美しさを現出させていることである。冬

子については、通夜の列席者たちのにぎやかなおしゃべりを《わたし》が主観的に遮断して抱懐したイメージをひとり追う中でのことであり、帯子については、望遠鏡で背景の富士山も含め周囲と切り離して眺める中でのことである。

従って、社会のあり方を写し出し、浮かび上がらせるメディア的存在たる二人のシャーマンは、その役割から解放され、外界から、関係性から切り離されている間だけ美しい姿を垣間見せるということになりそうである。

石川淳は、《わたし》の美しい従妹たちを時代の犠牲者として供し、そして《わたし》をその目撃者たらしめたのである。

先に、集団主義に親和的な帯子に対して、文学主義的、個人主義的な冬子、と書いたが、これは政治的社会的状況のことだけでなく、一九三〇年代半ばの文学史（小説史）の推移とも重なる。すなわち、文芸復興、大家の復活、転向文学、……から、戦記文学、生産文学、素材派、……へ、という推移である。<sup>(7)</sup>

冬子の死は、「虚構上の死（が事故として現実の死になったもの）」だったが、この作品が（小説の書けない小説家」という形式を採用していたことも思い合わせるならば、「虚構上の死」には同時に「虚構の死（文学の死）」という作者の時代認識が託されていたと読むこともできよう。それだけの見通しを虚構作品（小説作品）によって提出しようとしたその臂力に改めて感銘を覚えずにはいられない。

### 三

「変なはなしだと思はれるかも知れません。まったく変なはなしです。しかし、それを変だと思はないほど、僕は日常そのこ

とに慣れつこになつてあたんです。いや、さうぢやない。今でこそ変だといひますけど、そのときには別に何とも思つてゐなかつたんです。ともかく、いたづらといはうか常談といはうか、事実冬子にはそんな癖がありました。それがたうとう取りかへしのつかないことになつてしまひました。まったくぼくの不注意……ぢやすまない。何とも残念、みなさんの前でこの通り冬子にあやまります。」（五六〇）

これは、冬子の通夜の席での三治の挨拶だが、ここには非日常が日常の中に埋もれてしまう人の生のありようが巧みに語られており、小稿の始めのほうで引いた、辺見庸が触れていたくんだりとも連動している。

時代・社会のありようがたわみ、ゆがみ、ずれとして現われた時、それを表象すべくシャーマンが呼び出されるのであるが、ゆがみ、たわみに伴う違和感、危機感、日常／非日常のせめぎ合いの力学の中でなし崩しにされ、ややもすれば風化しがちなのもまた事実である。

「マルスの歌」の語り手《わたし》は《ひとびとを清澄にし、明確にし、強烈にし、美しくさせるために、今何が欠けてゐるのか》（五七七）と自問したあと、《思想》が必要だと思に至る。子どもや若い人たちが被爆の人体実験に供する今日の現実に生きる私たちは、成年男子を戦地に狩り立て女子をその応援団にした七十五年前の現実を描いた作品を前にして、今どんな《思想》が必要なのか、改めて思い巡らせなければなるまい。

注(1) 警保局図書課『出版警察報 第百十号』(㊟文書、一九三八(複製版、不二出版、一九八二))

(2) Zelko Cipris, *Mocking Militarism* (軍国主義を嘲笑すること), ② Counterpunch, April 10, 2003 ([http://www.counterpunch.org/2003\\_04/10/mocking-militarism/](http://www.counterpunch.org/2003_04/10/mocking-militarism/))

(3) 「永遠の不服従のために」(毎日新聞社、二〇〇二年)、『抵抗論―国家からの自由へ』(毎日新聞社、二〇〇四)、『いまここに在ることの恥』(毎日新聞社、二〇〇六) など(文庫化など再刊については記さず)。

(4) 『石川淳全集第一巻』(筑摩書房、一九八九) 五七六、五七七頁。以下引用に際しては、引用直後にこの底本のノンブルを示す。

(5) 「石川淳『マルスの歌』論―銃後総動員体制下の思想と自然」(『日本文学』一九九八・六) ↓山口『石川淳作品研究―「佳人」から「焼跡のイエス」まで』(双文社出版、二〇〇五、第五章)

(6) 『遠くで死にたくないひとが毎日たくさん死んでるときに』と言われる時の「死」には中国人とりわけ民間人の「死」も算入されているのだろうか。ニュース映画中の日本兵に慰撫される中国人の子どもの表情に無言の「NO」を《わたし》が読み取っていることから、作者の意図としては間違いないと思うだろうが、登場人物・帯子の水準ではどうだろうか。この問いは結局当時の日本人の一般的な認識を問うことにもなるう。

(7) 同時代の認識として、例えば、板垣直子『事変下の文学』(第一書房、一九四一)を参照。

## 受贈雑誌(一)

愛知教育大学大学院国語研究

愛知県立大学説林

愛知淑徳大学国語国文

愛知大学国文学

青山語文

歌子

宇大国語論究

愛媛国文研究

愛媛国文と教育

大阪大谷大学大学院日本文学論

叢

大妻国文

大妻女子大学紀要

大妻女子大学草稿・テキスト研

究所研究年報

岡大国文論稿

お茶の水女子大学国文

香川大学国文研究

学芸国語国文学

愛知教育大学国語教室

愛知県立大学国文学会

愛知淑徳大学国文学会

愛知大学国文学会

青山学院大学日本文学会

実践女子短期大学日本語コミュニティケーション学科

宇都宮大学国語教育学会

愛媛県高等学校教育研究会国語部会

愛媛大学教育学部国語国文学会

大阪大谷大学大学院文学研究科

大妻女子大学文学会

大妻女子大学

大妻女子大学草稿・テキスト研究

究所

岡山大学文学部国語国文学研究室

お茶の水女子大学国語国文学会

香川大学国文学会

東京学芸大学国語国文学会